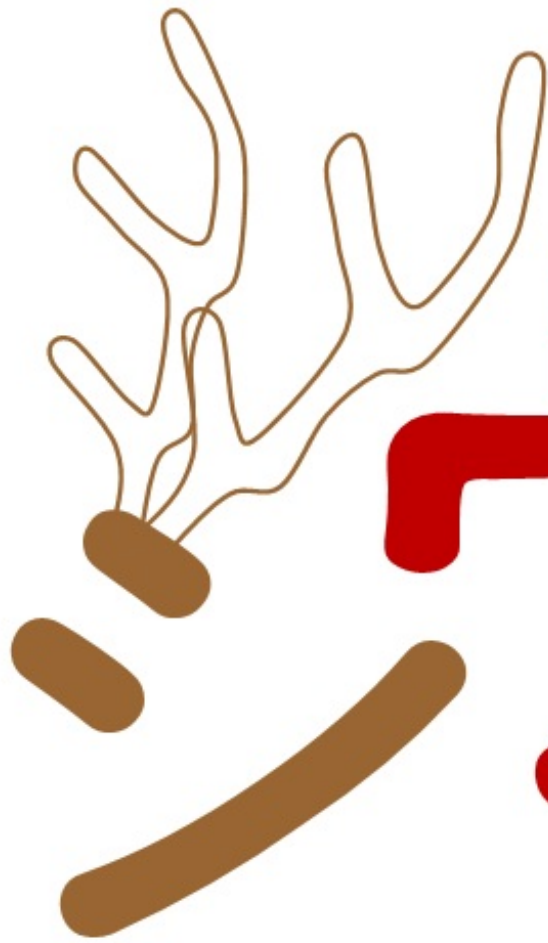


第四回と第五回セット 『恋する原発2』と『1Q84』再び

考

え

る



ママカ



弦楽器イルカ + 友人

## 第四回 『恋する原発2』～G から U へ～

---

監獄に対するリクエストに答えてくれてありがとう！ってか、内容が想像以上に監獄萌えでまたびっくり。

つまりUの記事を乱暴に超訳すると、アイドル含め現代の労働者は囚人と変わらない、懲役による労働システムに囚われていると。ただ、労働者たちがそこに気づくと暴動やストになるから、労働者に対する体罰は極力排して、囚人よりはマシって思わせたり、「いじめ、カッコ悪い。労働、カッコいい」ってゾノ前園使って宣伝したりすると。（してないけど。でも今こそ「体罰、カッコ悪い」の出番だと思うね。）

んで、支配層の金持ちが「ガッハッハ、労働者どもよ。お前らは囚人よりマシだぞ」って刷り込んでる流れに逆らうように丸刈り事変が起こり、実はアイドルが囚人と一緒だってバレそうになったから問題になったと。だいぶ跳躍できたな。

さて、我々はユルい囚人である、という極論を引き出せたところで、春樹が新しい長編小説を出すらしいって話に移ろう。俺の読みだと春樹は『アンダーグラウンド』新章として、被災者や原発作業員の聞き取りでノーベル文学賞を取りに行くのかと思ってたんだけど、ちと違かったかな。ま、新作はやっぱ震災も含めた内容かな。

それじゃ、ユル囚人であるところのウマシカな俺としても、震災に関連して我々が何に囚われているか、どんな痛みを抱えているかについて書きたいと思う。こっから冗談抜きの大マジだから。

まず簡潔に、事実から書く。

### ■作業中（一人休憩室内、一人勤務後）に亡くなった原発作業員

- ・2013年2月27日 50代 心肺停止（死因非公開）
- ・2012年8月22日 50代 急性心筋梗塞（休憩室内）
- ・2012年1月9日 60代 急性心筋梗塞
- ・2011年10月6日 50代 体調不良
- ・2011年8月30日 40代 急性白血病（勤務後体調崩す）
- ・2011年5月14日 60歳 心筋梗塞（実名報道あり）

### ■作業中に亡くなった除染作業員

- ・2013年2月28日 54歳
- ・2012年1月17日 59歳
- ・2011年12月12日 60歳

現状、上記の事実を一つにまとめた報道記事を俺は目にしたことがない。間違わないように公式な記事をネットで検索し直すだけでも、結構時間がかかった。彼らの死は被曝と因果関係がないと発表されてる。また、彼ら以外にも報道されていない、つまり作業と関係ない場所で亡くな

った方が何人いるのかも不明だ。ネットでは他にも死亡に関する真偽不明な情報がたくさんあるけど、ここでは確実な情報だけ書いた。

どっちの作業員も名簿の管理が必要以上にずさんで、誰がどこ行って何しているか不明なまま、って報道されてる。いまだに国が本格的に雇用を管理する動きも感じられない。いっそ人知れず死んだほうがいろいろ都合は良いんだろう。大金が絡んでるから。

でも列挙した理由はそういう憶測含めた話をするためじゃない。俺がここで言いたいのは、彼らはこの国の未来を守るために亡くなったって事実だ。もちろん仕事だし、金ももらう。でも彼らが死ななければこの国の未来はない。誰かが今この瞬間も死にに行かなきゃいけない。戦争と一緒に。そういう意味じゃ英霊って呼んでもいいくらいだ。まあ、英霊って意味よく知らんけど、国を守って死んだって意味ならたぶんそうだろう。

自分の命と未来を守る恩人がいつ何人死んだのか、同じ国に生まれながらどれくらいの数の人が知ってるんだろう。アイドルの丸刈りや、スポーツ選手の活躍とどっちが有名かな。

原発に反対しようが賛成しようが、TPPや消費税と一緒に大きな流れを変えることは難しいだろう。だからこの文章も、俺自身含めて改めて確認するために書いている。そう、みんな知ってる。あそこでは今もたくさんの方が命がけで働いてて、今までもこれからもそれなりの人数が死んでいくだろう。巷で噂の「命の授業」と一緒だよ。我々は彼らの命をいただいて生きてる。全国民にとっての「島人ぬ宝」だ。

そしてもう一つ。誰でもいいから作家に扱ってほしいテーマがある。自分にはわかりえない他人の痛みを想像するのが、文化の持つ意味のひとつだと俺は思うから、今痛みを持ちながら言葉を発するできない人にスポットを当てたいと思う。

避難せずに自分の子供が甲状腺がんにかかった親の気持ちについて。本当のところはわからない。でも、想像することはできる。蔑む声。哀れむ声。無関心な声。肯定的な声。否定的な声。救いを求める行き場のないたくさんの声が、自分の内側から響くだろう。

「いわんこっちゃない」「被曝のせいだ」「こうなることは始めからわかっていた」「避難すればよかったものを」「親の責任」「自業自得だ」

「可哀想」「あなたのせいじゃない」「被曝と関係ないんだから、親のせいじゃない」「どうしても避難できないんだから仕方ない」「手術しても死ぬワケじゃないから」

「そもそも原発が悪い」「政治が悪い」「脱原発だ」「いや、再稼働だ」「震災のせいだ」「福島に生まれなければ」「日本に生まれなければ」「10万人に1人、たまたま運が悪かった」「誰も悪くない、誰のせいでもないんだから」

「いや、自分のせいだ。自分が避難させていれば」

堂々巡りの、どこにも行き着かない言葉だ。他人は何とでも言えるが当事者にとっては、右も左も、肯定も否定も既に遅すぎるし、真相は知りえない。それにももちろん、たくさんの方がいろ

んな原因で病気になるし亡くなってもいる。どの命がより重いかなんてない。

ただ、2年前の3月11日以前には存在しなかった痛みが新たに生まれ続けているのは確かだ。その事実を書くことは、文化の存在意義に関わってくるんじゃないのか？ 誰かのためじゃなく、この国の文化のために必要じゃないかと俺は思ってる。

というわけだが、大マジはここまで。それでは、別な話をしよう。

まず、またやってしまった件。例の「俺ならこう書く菌」が流行のウイルスのごとく脳内で繁殖しました。しかも今回の題材は二つね。

一つ目は、高橋源一郎『恋する原発』を読んで思いついたこと。「魂込めて書いたのに誰も言及してくれない」って源一郎がラジオで拗ねてた下ネタ満載のアダルトビデオ文学なんだけど。60歳超えた文学界の重鎮がここまでチャレンジングな作品を書いたってことは素直にすごいし、若い作家は胸を借りるつもりで同じ土俵に上がって一番くらい相撲とってみろと感じた。

というワケで、ここから俺が頼まれてもないのに勝手に一人相撲とるから。だって源一郎、ラジオで「間違っても発言したほうがいいよ」って言ってたよ、俺に。いや、あれ絶対俺に言ってたって。だって電波系だから、俺。源一郎、責任、取ってね！（ラムちゃん風）

まず俺が編集者だったら、物語としてよりシンプルな『恋する原発2』を、一刻も早く源一郎に書かせるね。ストーリーは、最近のAVではホームレスやら漁船やら世界中の原住民やらに現地会でってセックスする「ご当地モノ」的ジャンルがあるんだけど、それを下敷きにして、AV女優が原発行って周辺に暮らす作業員をナンパして三人くらいと絡む、っていう展開にする。AV女優の過去、監督の葛藤、単身赴任の作業員とか悩みはいろいろあるだろう。それぞれの生い立ちとか背負ってる思いに焦点を当ててゆっくり物語を進行させ、最後のセックスシーンで、陽の目を見ないAV女優と作業員の気持ちが重なるって絶頂を描けたらかなりグッとくる仕上がりになると思う。マジックミラーの車で、原発の真ん前でね。これ、うまくいけばノーベル文学賞を春樹の横からかすめ取れんじゃないかな。ないか、それは。

あと、原発作業員の特別ドラマをテレビでまたやるみたいだけど、震災時じゃなくて、むしろ今の彼らを日常生活や恋愛に焦点当てて「月9」で放送してほしい。もちろん、途中で誰か作業中に亡くなるの。それを乗り越えて成長する主人公たち。タイトル『核猿』。結構マジなんだけど、どう、この大一番？ 源一郎、責任とってくれるかな。まあ無理か。

そういえば『恋する原発』内でナウシカについて、原作の漫画をなぜか映画って書いてた。あれ、「全部妄想です」って印でもあり、もっと話題になって完全版映画作ってって願いなんだろう。世間的にはナウシカ漫画版全然知られてないから、今更でも紹介して意味はあんだろうね。そういえば震災時、エヴァも〇号機とか暴走とか臨界点突破とか、直接的に連想したな。

んでもう一つは、このサイト内で見つけてしまったある電子書籍の創作コンテストなんだけど。俺もつい後出しじゃんけんで思いついてしまいました。お題は、「お客様の中に、\_\_\_\_はいらっしゃいませんか？」って言葉を穴埋めして使用すること。時間は、1時間15分以内。面白い作品がたくさん載ってたよ。

俺も大体時間内で書いたつもりだけど、きっちり時間計ってない上、本当に後出しだから卑怯だし、そもそもその人らも俺なんかには書かれないだろうけど、思いついたらどうしようもなく書いてしまい、かつ載っけちゃう、だらしなく不遜かつ嫌味かつ失礼な俺。ごめんなさい。橘いずみの『バニラ』以上に本当にごめんなさい。ちなみに今、榊いずみっていうみたいだね。知らなかった。これ最後に添付するね。

今回はこんな感じ。どうかな？

※以下 お題小説 添付

「お客様の中に、より客っぽい客の人はいらっしゃいませんか？」

舞台上から、サングラスをかけた初老の男が客席に向かってそう呼びかける。

他でもない、それが今年で30周年を迎えた「客っぽくていいともコンテスト」の幕開けを告げる、恒例の掛け声である。となれば、客席は当然、一斉にこう答える。「そうですね！」

いつもの掛け合いを合図にして、客席の客たちの我こそがもっとも客っぽい客であるというアピール合戦の火蓋が切って落とされた。

「ええー？」大物ゲストのトークタイムが終了であることに不満気な声を上げる客っぽい客。

よく柿を食べる客っぽい客。

「あれ、この席、この番号で合ってますよね？」自分が座るはずの席に誰か違う人が座っていることを、さりげなく周囲に知らしめる客っぽい客。

「ニッポン！ニッポン！」大声で声援を送りながら小さな日の丸を振りつつも、自分が映っている大型モニターに気づき、今度はカメラに向かって大げさに日の丸を振る客っぽい客。

「あ、すみません」後ろの席の人に一度謝ってから座席を少し倒すフリをする客っぽい客。

「ヒーヒッヒ！」周囲より先んじて大きな笑い声を上げることが生きがいの客っぽい客。

「あれ、この席、この番号で合ってますよね？」アドリブが利かない客っぽく、他の客っぽい客とかぶってしまう客っぽい客。

「カシャ」自分の目で見ると先にも先にスマホで撮ってしまう客っぽい客。

「zzz……」暗くなるとどうしても寝てしまう客っぽい客。

「エックス！」手をバツテンにして飛ぶ客っぽい客。

「白、ん～、やっぱ紅」赤色の札をあげて野鳥の会の人々の集計を待つ客っぽい客。

とにかくよく柿を食べる客っぽい客。

「あ、これ柿じゃなくて、牡蠣だった！」素人っぽいベタな駄洒落を狙って牡蠣を見せびらかす、客っぽい客。

優勝はもちろん、それでも黙々と柿という柿を食べ尽くす客っぽい客である。毎回そうだ。今回は12個食べた。その数字が持つ中途半端な大食感も、より客っぽいとして評価されたのは言うまでもない。

そして何より、その一部始終を舞台上からぼんやりと眺める黒いサングラスの人の、客以上に客然とした仕事しないオーラこそが、このコンテストが30年間続いてきたもっとも大きな魅力なのだから。



## 第四回 『恋する原発2』～U から G へ～

---

まずは監獄の話をまとめてくれてありがとう。超訳どころか、言いたいことをそのまま伝えてもらっているよ。そうそう、現代人はみんな囚人なんだよね。

ただ福島原発の死んだ英雄については、反論をさせてもらうよ。保険会社とか政府の統計によると、50代男性が1年間で死亡する確率は0.1%から0.2%くらい。つまり職場に1000人いれば、1年後にはそれが999人か998人くらいに減っているという計算だ。

原子力発電所で働いている人は約1万人くらいらしい。つまりは確率的に毎年10、20人はなんらかの理由で死亡しているはずなんだ。たとえ放射能の影響が全くない状態でも。

突然に死亡する場合は、心筋梗塞もそこそこ多いと思うけど、そのくらいの年齢の労働者が死ぬ場合の原因として10%くらいはあるんじゃないかな。そうすると、挙げてもらった死亡者と死因のリストについては、特別なところはあまりなさそうで、むしろ、平均的な死に方をしているって言えるんじゃないかな。むしろリストでは亡くなった人が少ないので、他にも亡くなっている人はいるだろうな。でも、特別なことがなければ報道されないだろう。単純にプライベートな話だと思う。

要するに原発作業中に死んでしまうのも、皇居をジョギング中に亡くなってしまうのもあまり違いがなさそうな気がするってことだがどうだろう？

原発に限らず、世の中の便利の影には、恐ろしい数の犠牲者がいたはずだ。

ところで、便利のために犠牲になった人がもっとも多いのは、なんだろうな。

おれは「火」か「自動車」だと思っている。火の方はちょっとわかりにくいから、自動車について考えると、これまで自動車事故で亡くなった人はどんだけいたんだろう？ 推定するのも大変だけど、かなりヤバイんじゃないか、自動車は。文明が生んだ悪魔って呼び方したほうがいいのかもね。

原発を無くせという前に、自動車を無くせとはならないのかな。思いきり世界観を変えれば、世の中には自転車と鉄道と飛行機があれば十分な気がするんだが、どうだろうか。もちろん、これら代替交通手段だって死亡事故を起こしているが、確率があまりに違う気がする。

「お客様の中に～」の小説面白かったよ。あんな短い間にあれだけ書けるなんて、おれからすれば、信じられない特殊能力だよ。うらやましい。おれも考えて見たけど、全然面白いものが浮かばなかった。





サイコーに腹の立つ、ど真ん中ストレートの直球をありがとう。学生の頃、殺してやりたいくらいの怒りで何度も喧嘩したことを思い出したよ。これで読者（特に女子）の「こいつら何言ってるの？」って冷ややかな目線さえ揃えば完璧な文章になると思うね。

繰り返すけど、Uの2chみたいな返しは本当にベストだ。まず誉めてくれたし、二人のバランスも取れたし、更に俺の真意とは微妙にズレてるから、改めて補足を広げやすくなった。

まず車について。Uの意見を現実的に考えるなら、鉄道やバス等の交通機関が発達してる都市部は、当然人口も多いし混雑してるから自動車事故も多い。となると、社用以外の車を減らそうってキャンペーンは普通にある話だ。「バスに乗ろう」とかね。

逆に人より先に牧牛に遭遇するような田舎道でよく「事故ゼロの村」とか看板あるけど、そりゃまあねって思う。人口より野生動物の方が多いいんじゃないのって。ただそういう場所では自家用車は必需品だ。

つまり都市部なら車を減らすことが人命を救うことにつながるかもしれない。でも更に現実的に考えたら、車を大々的に減らすキャンペーンはやっぱ不可能だろう。だって大金が絡んでるから。車業界や広告費もらってるメディア等が後退を認めるはずはない。自動車の事故死亡者数は少し前は年間一万人くらい、シートベルト取り締まってからは減ってるみただけど、その分事故後に障害を負って生き残る人は増加しただろう。また事故後何日で死亡したか、直後か30日後か、その日数を変えると統計の数字も変わるらしいから、金の動きに合わせて官僚やらがうまく調整してるはず。原発と同じ構造だ。事故が起きたからって簡単に止まるものじゃない。

さて、続いて原発作業員の本題へいこう。

俺は前の文章内で、作業員の死因が被曝と関係あるかどうか、その人数が多いのか少ないのか等は問題にしてない。そこは言い出してもわからない、俺ごときに調査できないブラックボックスの中だから。それよりも俺が言いたいのは彼らの扱いに対してだし、彼らだけじゃなく、たくさんの方の新しい痛みに対して文化が今どう向き合ってるかって話だ。ここ、ちょっとクリアじゃなかったから、あえて例示とか出そう。

例えば、ある集団がストライキを起こしたと想像してほしい。まず、自動車工場とかの従業員がストライキを起こしたらどうなるか。まあ、だいたいあぁなってこうなって。ある程度落ち着くところに落ち着くだろう。

では次に、警察とか自衛官がストライキを起こしたらどうなるか。海外とかで聞く話だ。いろいろ大変だし問題が起こるかもしれない。結構、危険な話だろう。

そして本題。もし、原発作業員が全員ストライキを起こしたら、原発はどうなるんだろう？想像した人、それぞれに考えはあるだろう。実際はわからない。ただ一つ確かなのは、原発はとにかく誰かが行って毎日作業しないと大変な事態になるってことだ。命を削る代償として幾ばくかの金をもらって仕事する人がいるおかげで、今日の前にある危機を日々延命してる、それがこの

国の一人ひとり、笑顔の裏に現存してる事実だ。

車の事故、国際衝突、そして原発復旧。いろんなタイプの危険があるけど、それに見合った注目を文化はしてるのか。作業員の死をまとめることもなく、彼らの管理はずさんなまま、そこから湧き上がるいろんな考えを取り上げるでもない。被曝で死んでないから、彼らの死はジョギングや自動車事故の死者と同程度の扱いだ。それについて「彼らの死はプライベートだから」って断言するのは、Uにしちゃちょっと学問的公平さに欠けると俺は思うんだが。だって天秤の片方の皿に乗ってる人命は、もう一方の皿に乗った考えられないくらいの大金と秤にかけられてんだから。更に手品よろしくビニールシートがかけられて、「中は暗いから見えません」ってあやふやな説明で、誰がどう重さを調整してもわからない仕掛けになってる。

甲状腺がんで子供が死ぬことも、震災以降まったく別の意味を持つようになった。でもそれは被曝と関係あるって話じゃない。震災以前ならまったく感じることのなかった新しい痛みを伴うってことだ。その痛みを文化は想像力で他人に伝える能力を持ってるが、持ってるだけでまだ使われてない。

それでいいのか文化？ってことを俺は書いたつもりだ。俺は原発に賛成反対の議論よりこっちが先だと思ってる。ついでに発送電の分離とか電力会社の独占禁止を先に決めれば、電話みたいに市場の原理で発電の流れも自然と変わるだろう。選挙だって脱原発より脱独占のほうが国民にはしっくり来ると思うのに。

ま、それでいいんなら別にいんだよ。アイドル同様、上手に囚人化されてる愚民どもの国だからね。あ、冗談だよここ。笑うとこだから。俺自身、こんな愚論を考えるのが精一杯の愚民です、ってオチでね。ひっひっひ。

結局、自分の身は自分で守るしかないんだ。

さて、次の話題についてなんだけど、TPPとか時事問題を文学的に表現したいと思ってる。目指すは池上さんのなわかりやすさでね。次に書くつもりだけど、あれ推してる人の中には「企業の力で官僚機構を打破する」みたいな目論見の人も結構いるよね。その企業ってのが国内だけじゃないからいろいろ問題あるんだけど、実際それが可能になりそうな枠組みだから。

でも、北の核発言とか、40歳定年制とか、アメリカ発のバブルとか、妙な感じのこと多いわ。さて、今回はこんな感じ。どうかな？



原発の件については意見の相違があったのかな？

おれは原発賛成の立場なので、原発について何かを話すと99%他の人と意見が食い違ってしまおうからね。なるべく原発については話さないように気をつけていたんだよ、実は。

原発賛成の立場からすれば、原発で働いている人たちは、まさにヒーローであり恩人だ。感謝しているよ。事実、危険と隣り合わせだと思うし、覚悟の上で働いていると思う。

だからこそ、あたかも作業員が被曝してパタパタ亡くなっているって、事実でないのに、隠された事実であるかのように言われてしまうと、反論せざるを得なかったんだよね。風評被害ではないけれども、根拠なく危険性のみを煽ることを止めたかった。

もし、原発作業員がストライキを起こしたらどうなるか？

まじめに働いている人たちのことを思うと、かなり不謹慎な想定だが、ほんの少しだけ話を進めてみたい。

原発は核反応し続ける臨界状態を起こし、熱エネルギーを得て運転しているが、制御棒を差し込めば、臨界は停止される。そのため、作業員が怠慢を起こして、運転のコントロールが失われたとしても、自動的に制御棒が燃料棒の間に挿入され、原発は臨界状態から安定状態になり、安全停止される。まあ「安全停止」とはいえ、それが大変なことだといえばその通りだが。

福島原発はそれ以上に大変なことが起き、メルトダウンした。もし作業員がただのサボタージュ以上のことをやれば、うまくすれば原発はメルトダウンさせられるかもしれない。でもそれはテロと呼ぶべき行為だな。特殊部隊が制圧して原発を安全停止させるべく動くはずだ。ものすごく不謹慎な想像だが。

ただ、今回の福島原発の件で初めて誤解していたことを学んだけれど、原子力発電所には核爆弾のような破壊力はない。構造が違う。原発には、核ミサイルのスイッチみたいなものがないという意味ではなく、どんなスイッチを押しても、あるいは押さなくても、核爆発は絶対に起こせない構造になってるらしい。もちろん万が一、震災の時のように再びメルトダウンして放射能が外部に漏れれば、広い範囲で人が住めなくなるけれど。

さて、原発の話はこれくらいにして、久しぶりに『1Q84』について。

ブームに湧いていたころ、世間では「リトルピープル」とは何かというテーマが話題になったが、結局ははっきりしないままだったという印象が強かったんだよね。

G. オーウェルの『1984』に出てくる、「ビッグ・ブラザー」との対比概念であることは間違いないと思う。ビッグ・ブラザーはソ連のスターリン政権をモデルにしていて、権力のピラミッドの頂点に君臨している。国民はつねに監視カメラのような装置でモニターされており、体制批判はけっして許されず、疑いを持たれるだけで、強制連行され、抹消される。主人公は体制下で、歴史の編纂の仕事をしている。刻々と変わる政治的状況にあわせて、過去を細かく書き換える仕事だ。たった一人に権力を集中させる国家体制には、必要な仕事なのだろう。歴史を書くとい

う行為と権力の集中が物語では結びついている。

一方、村上春樹の『1Q84』は、民主的な日本の1984年を舞台にしているが、現実の1984年とは少しだけズレがあるパラレルワールドだ。

現実との一番の違いは月が二つあるということだろう。まあ、これは虚構であり、小説の世界の話ですよ、そして、パラレルワールドに入っていますよという、言わば目印みたいな存在ということにしておこう。

もうひとつが、新興宗教団体のようなコミュニンによって、反体制派事件（浅間山荘事件に似ているがもっと過激な事件）が起こされ、それにより、国家による国民活動の自由が若干抑制されているという点がある。結果として警察の拳銃がより火力を増したという描写がある。

ふかえりは、「空気さなぎ」を書き、リトルピープルが出現して流出した。少しだけ体制的になった1Q84年の日本と、ふかえりの書いた「空気さなぎ」、リトルピープルがセットになっている。これは、『1984』の超体制的な世界と、主人公が書き換えている歴史、ビックブラザーがセットになっているのと同じ構造として整理しておこう。

これが何を意味しているかは、また今度、読み解いていくよ。



考えるウマシカ～第四回と第五回セット 『恋する原発2』と『1Q84』再  
び～

<http://p.booklog.jp/book/67755>

著者：弦楽器イルカ+友人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67755>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67755>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ